

1 学校教育目標 豊かな人間力をそなえ、自ら学ぶ たくましい子どもの育成	2 本年度の重点目標 1. 心の教育の推進 2. 学力向上の推進 3. 地域連携教育の推進
---	---

達成度	A: ほぼ達成できた B: 概ね達成できた C: やや不十分である D: 不十分である
-----	--

重点目標を具体的に評価するための項目や指標を盛り込む

3 目標・評価

① 魅力ある授業づくり(授業づくり)

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題(左記の理由)	具体的な改善策・向上策
学校運営	教職員の指導力向上	校内研修・授業研究会の充実	○校内研修で、研究主題を「主体的な学びの創造」とし、国語を中心に研究を進める。自分の思いを確実に伝えるために聞く・書く・話す活動を取り入れた言語活動の充実を目指す。授業実践に取り組む。さらに、児童自らが課題意識を持ち、その課題を解決するための活用場を取り入れた授業のあり方を研究授業を中心に授業を行う。 ○全員が研究授業を行い、研究の目標にあった授業作りに取り組む。	・国語科学習に関する児童への意識調査・実態調査を行い、児童の実態に合った授業を構築していく。 ・自ら考え、伝え合う言語活動を育む環境作りの推進として、国語タイムの計画と実施を行う。また、言語感覚を養うための校内環境整備につとめる。	B	・全職員が全体授業研の研修で意見交流をし、自分の授業に生かす努力をした。 ・「主体的な学びの創造」という研究テーマのもと、学年で教材研究をし、お互いに授業を見合って研究を進めることができた。 ・言語感覚を養うための校内環境整備を行い、児童の言葉に対する興味、関心を持たせることができた。 ・学年間のつながりがなく、学年それぞれの研究で終わってしまった。	・低中高学年グループによる全体授業研を行うことはできたが、全職員が指導案を書いている研究授業の実施率は90%にとどまった。そこで、来年度は、研究授業の計画を早めに立て、全職員による研究授業を実施し、授業力改善をめざしていく。 ・研究授業者への感想カードへの記入をお願いしたところ、たくさんの方から書いていただき、授業者への励みになった。しかし、グループ研まで入れると授業者が多いため、今後は研究推進委員の先生方の協力を仰ぎ、徹底していきたい。 ・「めざす子ども像」をはっきりと提示していなかったため、学年間の指導のつながりが不十分であった。低中高別のめざす子ども像を設定し、学年間のつながりを意識しての授業を実践していきたい。
教育活動	●学力向上	国語科・算数科を中心とした基礎基本の徹底	○学期末テスト90点以上が全体の80%以上を目指す。 ○「学びのスタイル」における「筆箱の中身」の整頓と朝の「姿勢タイム」参加率を80%以上の児童に定着させる。	・学力調査等を分析して、課題を明確にして、解決するための手立てを講じる。(研修会1回以上) ・学期末テスト90点以上を合格とし、合格証を渡す。 ・スキルタイム(国)を設定し、作文プリント等語学力を高めるためのプリント等を用意し、言語力の定着を図る。 ・生活習慣のチェックカードを全クラス使用し、筆箱等の学習用具や正しい姿勢、学習態度の定着を図る。	B	・少人数やTTの授業が「分かりやすい」「どちらかといえば分かりやすい」という児童は、94%であった。また、70%近い児童が、「分からないところを聞きやすい」「先生が分からないところを一人一人よく見てくれる」と答えていることで少人数やTTの授業の効果が出ていると言える。算数科の授業を中心に、学級担任と少人数TT担当者が連携して役割を確認しながら、個に応じたきめ細やかな指導を行ってきた。 ・6月に学力調査分析の研修会を行い、学校の実態を全職員で共有し、日々の授業改善に生かすことになった。また、授業作りのステップ123を活用し、児童同士の伝え合う活動を入れた授業づくりを推進した。 ・毎週木曜日の朝のスキルタイム(国)では、読解問題を扱い、前日に配付したプリントの音読から入るなどスキルタイムの全体的な形を整え、全クラスで確実にスキルタイムを実施できるようになった。 ・「学びのスタイル」については、各教室に掲示するなどして全職員で指導に当たるだけでなく、例えば朝の「せいタイム」を設定し、全校的に取り組んだ結果、80%以上が姿勢を整えようという意識が高まってきた。年間を通して「家庭学習ががんばろう週間」を実施し、児童や保護者の意識改革に努めた結果、家庭での学習用具が揃うようになってきた。	・少人数やTTの授業により、児童が自ら学習しようとする意欲が高まっていることは効果的といえる。各学年の算数科市販テストでは、どの学年も知識、技能面では期待平均点を上回っていたが、「考え方は、他の領域よりも低く、基礎基本の定着に加え、思考力の育成が課題となった。学期末の漢字合格証は、児童の意欲を高めるのに効果的であった。 ・国語のスキルタイムの形をまなび部で検討し、同じ流れで実施しといったことで、確実に読解問題に取り組めることができた。 ・朝のせいタイムの放送で学校全体が静かになるようになり、非常に効果があったと考える。授業の始めと終わりに全職員による継続指導の結果、落ち着いた授業に取り組む雰囲気が出てきた。 ・「家庭学習ががんばろう週間」の取り組みにより、少しずつではあるが家庭学習が習慣化しつつある。家庭学習の手引きの作成や今年度の取り組みを継続し、指導の徹底を図っていくことで、学習意欲を高め、落ち着いた学校をめざしていく。
	◎教育の質の向上に向けたICT利活用教育の実施	授業における指導方法の改善	○電子黒板、デジタル教科書、書画カメラ、パソコン室のタブレットPCを日常的に活用し、調べ学習や表現活動を行う。 ○情報モラルの教材を活用した授業を毎学期実施し、ネット上でのマナー、個人情報保護など発達段階に応じた指導を行う。	・電子黒板の機能や、付属の機器の使用方法やネットモラルについての研修を年3回以上行い、教職員のICT機器に関する危機管理意識の啓発とスキルアップを図る。 ・ネットモラル検定を行う。正答率の低かった問題については、教材を活用して情報モラルの指導を進める。	B	・電子黒板やパソコンを使った授業を受けるのは、楽しみだと答えた調査対象児童は99%、情報機器を用いた授業は役立つと答えた保護者は95%と高かった。 ・情報モラルに関する教材を活用した指導を全学年で毎学期行った。個人情報や著作権などについての理解を深めることができた。 ・電子黒板やデジタル教科書を日々の授業で使うことで、スキルアップを図ることができ、ICT支援員との連携は十分にできなかった。	・デジタル教科書や書画カメラなどICT機器を活用することによって、図やグラフを拡大して提示したり、ペンで書き込んだりすることができ、児童に興味・関心を持たせ、学習のポイントを明確につかませることができた。 ・情報モラルを身につけさせる指導を毎学期行ったことで、情報を取り扱う際のルールやマナーを守ることの大切さなどに気づかせることができた。今後も教科書総合的な学習の時間などに関連を図りながら、計画的に指導を行いたい。 ・パソコン室利用のマナーが不十分な時があり、タッチペンなどの周辺機器の使い方や椅子の座り方、片づけなどを教師指導で共通理解し、児童に徹底させる必要がある。 ・CUBEキッズなどの教材ソフトを効率よく授業に生かすため、ICT支援員を効果的に活用していく。
	外国語活動	外国語活動の充実	○外国語活動を楽しみとする児童を85%以上にする。	・5・6年では、ALTとの協力で活動的な要素を取り入れた授業に取り組む。 ・1年～4年生までのクラスでALTと担任による「外国語活動」の時間を1時間以上設定する。	B	・どの学年も、計画通りに外国語活動を行うことができた。 ・授業の中で、ビンゴゲームやミッシングゲームなどを取り入れ、児童が楽しく外国語に触れる経験を増やすことができたが、ALTと担任の連携を更に図る必要がある。 ・学校評価アンケートの結果、英語を使ったゲームや学習を楽しんでいたと回答した児童は90%と高いが、保護者と教職員は70%を下回っている。	・低学年から英語の発音に慣れ親しんだりALTと触れ合ったりでき、積極的にコミュニケーションをとろうとする意欲や態度を育てることができた。 ・HRTだけの授業も、外国語に慣れ親しみ、積極的にコミュニケーションを図ることができるよう、指導の工夫を行う。 ・30年度より、外国語活動が3、4年生15時間、5、6年生50時間と増加することから、新たな英語教育に対応した指導力向上を図る。

② 道徳・人権教育の推進(心づくり)

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題(左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	●心の教育	道徳・人権・同和教育などを核とした心を育てる指導の充実	○人権・同和教育を全教育課程の根拠とした教育活動を構築する。 ○子どもたちの自己肯定感を高める教育実践を重ねる。	・人権教室(年6回)・人権集会(学期に1回)・道徳等の授業を通して、子どもたちに人権尊重の感性を育てる。 ・参観日やフリー参観日において、全校道徳授業や人権学習等を公開する。(地域連携) ・子どもたちの認め合いの場を設定し、ほかほか言葉を増やす取り組みを行う。	B	・全校の人権集会に加え、各学年の人権教室は、発達段階に応じた内容を扱い理解を深められた。 ・道徳の学習は、参観日やフリー参観日など、全クラスで「ふれあい道徳」として、授業を公開することができた。人権映画や平和集会では、保護者などに呼びかけて参観してもらったことができた。 ・ほかほかの木やありがたカードなど、全校、各クラスでのいろいろな取り組みで、子どもたちの温かい交流、行動が増えた。 ・友だちへの口調や言動についての気になる姿もときどき見られる。	・道徳の時間や人権教室、人権集会、平和集会などを通して、「友だちに優しくしよう」「友だちのよさを見つけよう」「命は大切」などの思いを持つことができた。 ・先生たちが見つけた子どもたちのよい行動を全校で紹介することで、ほめられた子どもはほめられ、周りの子どもと一緒に喜び、進んでよい行いをすることに意欲を持つ子どもが見られるようになった。 ・温かい言葉かけや行動がより見えるような支援、指導が必要である。
	●いじめの問題への対応	いじめの早期発見・早期対応に向けた体制作りの充実	○担任を中心に実態把握に努めるとともに、教育相談体制を充実させ、スクールカウンセラーや保護者との連携を図る。	・生徒指導協議会、教育相談部会等を利用して、職員間の共通理解を図る。 ・Q-Uアンケート(6月、11月)で学級における人間関係をつかむとともに、いじめに関するアンケートや、ほっとタイムで実態をつかむ。 ・いじめがなかった初期段階で、事実確認をし、対策の検討および指導を行う。	B	・「〇月のわたし」を毎月実施したことで、子どもたちの悩みや不安に気づくことができ、昨年度よりも早く対応でき、解決につながった。 ・6月と10月の「ほっとタイム」を6日間設定して、時間を長くしたことによって、一人ひとりの子どもとじっくり向き合うことができた。直接話さずとも、困り感や友人関係等の実態把握に役立った。 ・問題となる事象が起きたときには、保護者と連携を密にしながら、生活連絡会などで迅速に共通理解をして、全職員で対応に取り組んだ。しかし、職員間でもっとじっくり情報交換して対応を考える場が必要であった。	・いじめ防止や早期対応のために、初めに「〇月のわたし」で児童の実態をつかみ、「ほっとタイム」で話を聞き、さらに「Q-Uアンケート」を行うことで、よりよいクラスづくりに向かうことができた。 ・「Q-Uアンケート」では、子どもたちの様子を確認することは出来たが、専門的な分析をすることで、より効果的に生かしていきたい。 ・教育相談に関して、小グループで具体的な対応の検討ができる場を設ける。
	環境美化	校内・校外の環境・美化活動の充実	○ごみが落ちていない美しい学校をめざすとともに、ゴミの減量化、節電を中心とした環境ISO1に取り組み。 ○掃除の始まる時刻を意識し、集中して活動することで、一生懸命に取り組む児童を育成する。	・ごみを落とさない、ごみを進んで拾うように指導する。 ・無言掃除を行い、集中して掃除に取り組めるように掃除の方法や手順を指導する。 ・掃除の始まり、無言そうじの内容、片付け等について、学年で決めた様式で反省する時間を毎日持たせる。その反省カードを使って、グループやクラスで認め合い励ましあつたりする活動を週一回以上行わせる。 ・ゴミの分別や記名の徹底を図るとともに、裏紙の再利用などに努める。 ・節電、節水を心がけ、省エネ・省資源に努める。	B	・全校朝会や学級活動の時間に掃除の仕方が具体的に分かるように指導したり、掃除用具の使い方や隅々まで掃除をする態度を動画等でほめたりした。そのことにより、静かに掃除を行うことができるようになった。 ・運動場から教室への戻りに時間がかかる児童が多く、取りかきが遅いが、時間いっぱい掃除をする姿は見られる。 ・環境週間に設定し、児童の意欲を高めるとともに、家庭へ学校の取り組み紹介を行った。家庭での環境に優しい活動の紹介をお願いしたりして、家庭と連携しながら環境ISO1に取り組んだ。 ・各学級に2名のエコ係を置いて、節水・節電・ゴミ分別・残菜減量に全校で取り組んだ。全学級の参加するエコ会議を開くことにより、環境保全への意識付けを行うことができた。 ・職員においては、可能な場合両面印刷やリユースをして児童の指導に生かしたり、両面を使い終わったプリント類や段ボール等を輪番制でリサイクルに出すことにより日常的に環境に良い活動を行うことができた。	・静かに隅々まで丁寧に掃除をすることができるようになった。 ・掃除のグループ別の反省カードを各学年で決め、各学級で清掃指導に取り入れたことで、自己評価を生かして掃除に臨ませることができた。しかしながら、さらに、各学年の形式を統一した上で、発達段階に即しているのかを全職員で確認する必要がある。 ・掃除の始まる時間に遅れないように指導を継続する。 ・自分たちの活動と環境保全の関係を認識していない児童へ、適切な説明を行い、さらに啓発に努めたい。
	読書指導	学校図書館の活性化と読書指導の充実	○目標を達成しやすくするために学期ごとに目標冊数を提示する。 ○学年にあった本(必読図書)を、7割の児童が目標冊数を達成できるようにする。	・学級全体の貸し出し冊数を増やすために「めざせ〇冊」などの取り組みを推進し目標冊数に達した児童に賞状を準備する。 ・「朝の読書タイム」、読み聞かせの時間を全校あげて設定する。 ・各学年の必読図書を読むよう推進し、目標達成者を表彰する。	A	・学期ごとに貸し出し冊数を決めて、読書指導し、目標に達した児童には賞状を渡したりした。そのことにより貸し出し冊数も、4月から一人あたり112冊借りており、昨年度を上回っている。 ・その学年に応じた必読図書を設定し、目標に達した児童には、「読書の木」に花を咲かせたり、賞状を渡したりすることにより、低、中、高学年では貸し出し冊数が増え、読書の質が向上した。 ・「朝の読書タイム」では、黙読したり、学期に4、5回ボランティアの方の読み語りや朗読を聞いたことで、様々なジャンルの本を読もうとする態度が育った。 ・「図書館まつり」では図書委員が、工夫を凝らす活動を自主的にを行い、昨年度を上回る児童の参加が見られた。	・一人あたりの貸し出し冊数は増えたが、特に高学年では個人差が大きかった。図書室に行く機会を設けたり、授業の内容を深めるような本を紹介したりして、読書活動に対する興味関心を高めたい。 ・図書館を使った「調べる学習」の充実を図る。 ・借りた本の予約や人気のある本の紹介は児童に好評なので、今後も継続していきたい。 ・学期ごとに目標冊数を設けることは、スモールステップで達成感を味わうことができるので、続けていきたい。 ・様々な教科書の調べ学習等を通して、読書活動の拡大を図る。
	交流活動	縦割り活動における異学年交流や、ろう学校との交流会の充実	○「わいわいタイム」での異学年交流活動を充実させる。 ○ろう学校に交流したり、来てもらったりして交流を実施する。 ○地域(老人センターや保育園)に出向いて交流を実施する。 ○各学年で、具体的目標を定めて、交流を行う。	・春の遠足、運動会、縦割り遊び、あがり会食会等の活動を通して、異学年交流に取り組む。 ・ろう学校児童を学校や授業などに招待したり、出向いたりして交流を行う。 ・ろう学校の児童と手紙などのやりとりを行い、交流を深める。 ・交流委員会を中心に地域との交流を行う。	B	・わいわいタイムによる縦割り遊びや春の遠足、運動会、あがり会食会、遊びなどを通して6年生を中心に異学年交流を深めることができた。 ・ろう学校とは該当学年同士での交流会を進めることができた。事前に担当者同士で打ち合わせすることで実態に合った交流を行うことができた。(1月の交流が本校のインフルエンザ罹患者増加のため実施できなかった。) ・開成文化祭では、地域の方々の活動を知り、結びつきを深めることができた。 ・交流委員会を中心に老人センターや保育園など、地域との交流に取り組むことができた。	・わいわいタイムの縦割り遊びでは、いくつかの遊びが固定化しているため、学活の時間等を利用して遊びの種類を増やしてより活性化していくようにしたい。 ・該当学年では、ろう学校を訪問したり、学校に招待したりしてより交流ができた。その場限りの交流になることが多いので、学期に一度手紙を交換するなど継続的に関わりを持たせようとした。 ・本年度はインフルエンザ流行のためろう学校との交流が計画通りに実施できなかったため、こころゆゆうを行う時期を検討していきたい。 ・開成文化祭の交流やろう学校や保育園との交流は今後も続けていきたい。

③ 生徒指導・教育相談・特別支援教育の充実(心づくり)

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題(左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	特別支援教育	配慮を要する児童についての共通理解	○特別支援教育関係等機関の講師を招いての研修会を開催する。(年1回) ○校内支援会議を適宜開催し、特別支援教育の充実を図る。	・個別の教育支援計画・個別の指導計画の作成と、共通理解に基づいた支援を行う。(月1回) ・配慮を要する児童への校内支援体制の取り組みを行う。 ・支援の手立てについて共通理解したことを、対象の児童の指導・支援に活かす。	B	・個別の支援計画に基づき、児童一人ひとりの実態に応じた支援をすることができた。 ・困り感をもつ児童について、担任や特別支援コーディネーターを中心に、その子に関わりのあるメンバーで校内支援委員会を開き、必要に応じて関係機関や保護者と連携した支援を行うことができた。 ・支援会議や教育相談で児童の経過を確認し、支援のあり方を共通理解し、具体的な支援を行うことができた。 ・講師を招き、ユニバーサルデザインについての理解を深めるために、校内研修を行った。	・担任や特別支援コーディネーターを中心に、関係機関や保護者と連携した支援を行うことで、児童の困り感を軽減することができた。 ・学級担任が作成した個別の支援計画に基づき、児童一人ひとりの特性に寄り添った支援や学習環境を考えていく必要がある。 ・特別支援教育の職員研修をすすめることで、校内支援体制を整え、さまざまな困り感をもつ児童の理解や指導・支援にかかしていく。 ・ユニバーサルデザインを取り入れた学習環境を整えていく。 ・インクルーシブ教育についての職員間の理解を深めていく。

④ たくましい体と粘り強い心づくり(体づくり)

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題(左記の理由)	具体的な改善策・向上策
----	------	--------------------	-------	-------	-----	--------------	-------------

学校運営	危機管理	不審者対応、災害時(大雨、台風、地震、大雪等)における緊急時の組織づくりと具体的対応	○大雨や台風、地震、大雪、不審者事案等、実際の事象や事例に基づいて指導をすることで、児童の防災・防犯の意識を高める。 ○安全な避難に重点を置いた、危機管理体制の充実を図り訓練を実施する。(年3回)	・各種事例に対応できるように危機管理マニュアルを更新し、児童と職員を対象とした実践的な防災・防犯訓練を行う。 ・現在ある安全マップを更新して活用し、校区内の危険箇所の点検を実施するとともに地域の人と協力して登下校の安全確保に努める。また安全についての児童の意識化に努める。(毎週金曜日、当番職員で下校指導に当たる。) ・安全ボランティアと協力し校区あげて安全指導に取り組む。 ・校内の安全点検を毎月1回行い、児童が安全に生活できる環境をつくる。 ・緊急連絡メール登録による迅速な連絡体制を整える。	A	・水難による避難訓練を6月15日に実施した。前年度の反省により、今年度は、集団下校ではなく、教室での保護者への児童引き渡しの実施訓練を行った。 ・不審者対応避難訓練・防犯教室を10月4日に実施し、職員による不審者対応への指導や犯罪被害防止についての児童への指導を行ってもらった。今年度は初めて北校舎に不審者が侵入したケースを実施し、適切な避難経路を確認することができた。 ・PTA主催の町区懇談会において、保護者や地域の方に大雨の際の道路冠水箇所や交通事故が起きそうな危険箇所について教えていただき、職員で共通理解を図り、児童への指導を行ってきた。 ・地域安全ボランティアの「見守り隊」の協力を得ながら、子どもたちの登下校の安全・安心に向けた取り組みを進めることができた。また、職員の安全指導に関する自己評価は3.8ポイントと高い意識が見られた。 ・毎週金曜日を下校指導日として設定し、全職員輪番制で地域に出向き下校経路の巡回をすることで、下校後の安全について実態を把握し随時指導に当たった。 ・安全・健康面から名札・帽子の着用を年間を通して指導を行った。 ・保護者への緊急連絡事案が11件あったが、緊急連絡メールの登録率が98.3%となり、迅速に伝えることができた。平日であれば、下校までに文書で補足した。 ・食物アレルギー対応のための職員研修を4月の給食が始まる前に行うとともに、食物アレルギー対応のための調理実習計画を提出することも確認し、食物アレルギーによる事故防止を図った。 ・1型糖尿病の児童が出たために、全職員でその症状や対応の仕方などを共通理解を図った。	・水難による避難訓練において、各教室に保護者が迎えに行くという方式にすることで、確実に引き渡しができた。学校に残っている児童の把握もでき、迎えを待つ間の過ごし方も指導しやすかった。次年度以降もこの方法で訓練を行った方がスムーズに行えると思われる。 ・不審者対応避難訓練・防犯教室は、職員の不審者への対応を実際に行い、意識化につながっていった。毎年実施することで、さらなる意識化を図りたい。様々な状況における適切な避難経路を常に確認し、改善を図っていかねばならない。 ・町区懇談会で新たな問題などを把握することができ、指導に生かすことができた。 ・地域安全ボランティアの「見守り隊」の協力体制が確立してきた。毎年感謝を伝える会を実施しているため、良好な協力体制を強化していきたい。 ・名札・帽子の着用は高まってきたので、防犯ブザーの携帯の呼びかけを行い、定着を図ってきたい。 ・保護者への確実な緊急連絡方法についての確認と緊急連絡メールの登録推進、受信確認を行った結果、登録98.3%となり、迅速な連絡体制を整えることができた。メール登録率が向上しているため、未登録者の把握も素早く行い、情報を迅速かつ正確に伝えるようできてきている。 ・食物アレルギーについては、給食だけでなく、学校における飲食に対する危機意識も高めることができた。 ・1型糖尿病の児童への支援体制ができ、その児童に大きな問題はなかった。
教育活動	●健康・体づくり	体育・学級活動・保健指導など、授業実践	○学級活動で、保健指導、食に関する指導等において、養護教諭や栄養教諭による専門的な指導(各年間3回)を行い、健康な体づくりへの関心を高め、行動変容への意欲につなげる。 ○外部講師の活用を積極的に行う。(年3回) ○保健タイム等を通して、児童に各担任が指導を行う(年3回)	・健康教育については、担任と養護教諭などのTTによる授業を行う他、歯科校医や外部講師を招いた授業を行う。 ・運動の大切さについて、体育や保健指導を通して、担任が行う。 ・給食マナーや食生活の大切さについての指導を、栄養教諭が年に3回以上行う。 ・学期に1回、朝の時間に「保健タイム」を各担任が行う。資料については、児童保健委員会と養護教諭が作成した保健指導用スライドを使用する。	A	・6年生へ「保健タイム」についてのアンケートを行った結果、スライドを使った勉強はためになりましたかという問いに「ためになった」「だいたいになった」と答えた児童が98.6%であったことから、「保健タイム」が児童の保健教育への動機づけとしては効果的であることが分かる。また、保健学習や外部講師・養護教諭による保健指導などを「保健タイム」と関連づけをし計画実施したことで知識・理解を深めることができた。 ・「保健タイム」直後は指導されたことを実践できていても、継続できない児童もいる。このため根気強く何度も習慣がつくよう指導し続けることが大切である。「保健タイム」後も担任が指導を継続してできる工夫が必要である。 ・新体力テストの結果を生かした授業を行っていき、子ども達がより積極的・意欲的に運動を行えるよう指導や支援の方法を考えていく必要がある。 ・体育の授業や20分休みに「マラソントime」を実施した。児童たちは積極的に、楽しんで参加していた。来年度は「マラソン大会」等、日ごとの成果を発揮できる行事等の実施も検討していく必要がある。 ・指導後は意識できて、時間の経過とともに意識が薄れる傾向があるため、望ましい食習慣を身につけさせるためにも、継続した指導と支援をしていく必要がある。	



本年度の重点目標に含まれない共通評価項目

領域	評価項目	評価の観点(具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題(左記の理由)	具体的な改善策・向上策
学校運営	学校経営	本年度の重点目標の周知	○教職員、児童、保護者、地域住民に周知する。保護者の認知度を80%以上にする。	・職員会議、全校集会等で説明したり、校内に掲示したりする。 ・保護者や地域住民へは、ホームページへの掲載、学校パンフレット配布及び学校便り、PTA総会、学年・学級懇談会等で周知し、具体的取組について説明する。	B	・学校目標の保護者や児童への周知に関しては、PTA総会や全校集会などで校長が話をしたり、学校便りや学校紹介のパンフレット配布、学校HP、校内掲示など、あらゆる機会に周知を図った。 ・学校評価のアンケート結果では、99%の保護者が「学校は学校目標の周知に努めている」と回答し、100%の教職員が「学校目標を念頭に教育活動をしている」と回答している事より、周知の結果が出ている。	・保護者、教職員へ、様々な手立てを取り、継続的に周知を図っていることについての評価のポイントは昨年度より高く99%であった。但し、保護者アンケートでの目標の認知度は68%で、平成28年度の67%と比較して微増しているが、具体的目標の80%には達していない。しかし、毎年少しずつ認知度が上がっているため、今後もあらゆる機会を利用して周知し、認知度を高めるよう工夫・努力を継続していく。また、保護者が認知しやすい重点目標を設定していく。
	開かれた学校づくり	学校教育活動の情報発信 地域人材活用	○ホームページ更新、学校便り等で、「開成文化祭」の計画、準備を進める。 ○地域の人・もの・ことに積極的に関わる学習を学年で年2回以上行う。	・ホームページを月1回以上更新する。月末を更新時期と定め、更新を促していく。また、学校便りを月1回以上発行する。 ・ボランティアの拡大と地域人材の発掘を行い、活動の促進と工夫を行う。	B	・学年のホームページを定期的に更新することができた。学校便りも月一回以上、定期的に発行できた。学校評価アンケートでも97%の保護者が、情報開示に「おおむねできていく」と回答している。 ・i-schoolを活用し地域行事の案内を行い、職員に協力を仰ぐことができた。 ・地域との共催行事「開成文化祭」は、公民館との情報のやりとりをパソコンメールでも行い、連絡などを迅速に行うことができた。 ・今年度は新規に募集をかけ、支援ボランティアの拡大を図った。各学年の要請に応じ、スキルタイムをはじめ、交通安全教室や登下校の見守り、クラブ活動の補助等、計画的にボランティアの活用ができた。	・ホームページの更新は、教育ICT担当教員が定期的に更新を促していたが、更新回数が少なく、学期末にまとめて更新しがちになっていた。学年でホームページの担当教員を決めるなどして、引き続き月1回の更新を目指していく。 ・地域の人材活用を積極的に進めていくためにも、教職員一人ひとりが支援ボランティアとの関わりを深め、連携を図っていく必要がある。また、教科(社会科や理科、生活科)に関わる人材発掘を進めていく。 ・スキルタイムにおいて、各学級でのボランティアの方々の人員配置が十分ではないため、さらなる登録が望ましい。
特定課題	幼・保・小・中連携	幼・保・小・中連携による学校生活へのスムーズな移行	○幼・保・小・中間の連絡会や授業交流を進める。(年間4回) ○小・中間の生徒指導の情報交換を行い、連携の強化を図る。	・わくわく訪問の参観後や幼保小連携会議で幼稚園・保育園との情報交換を行い、相互理解を図る。 ・1年生と園児との交流会や学校体験活動により、スムーズな接続を図る。 ・小6から中1へのスムーズな移行をめざし、「体験入学」や授業交流の改善を図り実施する。また、小小交流(6年)を行い、友だち関係に対する不安を除く。 ・小・中合同の連絡会議を学期毎に行い、生徒指導に関する情報の提供を進めるなど連携をとりながら問題の解決を図る。	A	・幼保小連携会議では、学期ごとに園児や児童に関する情報交換や行事に関する話し合いを行い、教育活動に生かすことができた。 ・幼稚園や保育園の年長児を招いての交流活動は、計画的に関くことができた。園児が喜ぶ様子を見て達成感を味わい、99%の児童が幼保との交流が楽しかったと答えた。園児も小学校入学を楽しみに待つ心情を高めることができたと思われる。 ・生徒指導協議会やたんぼの会等で鍋島小・中学校の生徒指導と情報交換を行うことができた。 ・体験入学で中1へのスムーズな移行をめざした取組みがなされていることに対して、保護者から80%の評価をえた。中学校での体験授業を受けることで、中学校への不安を和らげることに、つながったと思われる。 ・卒業前に児童が企画して、6年生の小小交流を行い、顔合わせを楽しむことができた。	・昨年度に続き、小学校教職員が夏休みに保育参観及び体験を行った。幼児との関わりについて多くの学びがあり、幼保小の連携会議での意見交換も活発になったと思われる。 ・1年生との交流だけでなく、2年生の町探検の学習や、6年生の委員会活動(交流委員会)でも幼保小の交流活動が充実できたと思う。今後は、他学年とも関わりをもつ機会をつくり交流できればと思う。 ・問題行動等の迅速で的確な解決を図るため、小中学校の密な連携や協力体制の維持・強化を図っていく必要がある。 ・平成27年度から再開された小小交流(児童が計画したもの)は、児童同士のつながりを作るのに効果があった。事前の教師間の打ち合わせの時期を考慮する必要がある。 ・中学校での体験授業は、児童にとって中学校の先生の授業にふれるよい機会でもあることから、小中連携を充実させていきたい。そのため連携体制の見直しが必要である。

4 本年度のまとめ・次年度の課題
 ・教職員による学校内評価では、各項目の目標達成度でB判定が多かった。具体目標とその方策をもって目標値に届かなかった部分があり、次年度の課題が明確になったことと思う。保護者の意見としては、心の教育や学力向上に学校はよく取り組んでいると答えており、学校全体としての取り組みを評価している部分が多かった。明確な目標を決め、それに向かって各部を中心として全職員で組織的に取り組んでいる成果が出ていると考える。次年度も、課題解決に向けて、良かった取り組みは継続しつつ、良くなかった部分については、よりよい解決策を見いだし、取り組んでいく。

●は共通評価項目のうち必須項目、◎は共通評価項目のうち特定課題、○は独自評価項目